

福岡大学医学会ニュース

福岡大学医学会

福岡市城南区七隈

福岡大学医学部内

印刷 福岡印刷株式会社

福岡市博多区東那珂一丁目10-15

医学部在職中の思ひ出

医学教育について

福岡大学名誉教授 曾田 豊二



医学部創設当初よりお世話になっていました私にとって、この二十三年間を振り返る機会を与えて頂いたことに心から感謝を申し上げます。

色々考えて、自省の比率の最も多いと思えます医学教育について感じたことを申し上げるのがよいのではないかと思いました。

教育をする側、とくに教授から見て教える側と教えられる側に大きなギャップがあることは現在良く知られていることで、これは面白い表現であります「教授錯覚」とも言われているのです。しかし教える側も必ずしも反省して、このことは教わる側のことを配慮する事により状況は変わりました。それは教育の主体を学生において、自主的に学習し、評価も自ら行うような教育方針を考えるようになったこと、どこやら日本も諸外国並になり今日的な教育状況になったと考えたいと思えます。

私の学生時代の経験でいまだに記憶していますのは、ある高名な内科の教授の臨床講義です。

講義のテーマは「ワイルド病」でした。患者の紹介から既往症、検査結果としてワイルド病に至る診断思考と「ワイルド病」の歴史から診断、

検査、治療が六月以上の長きに亘って行われた広範な「ワイルド病」でした。この講義では学問の成り立ちはこのように考えるのだと先生は我々学生に教えられるのだと思えます。勿論、それだけの先生方は自分の教育に対する理念に基づいて講義をします。それぞれ独特な考えをお持ちですので、スタイルが違いましたが印象深く覚えておられます。

これは現在行われている医学教育の「learning strategy」とは違っています。講義の際の勇姿を想い浮かべると先生の strategy は明確です。現代風でないが、学生へ何かを伝えようという想いは強烈で風格があり、我々学生に発信したことは想い出になっています。しかしい出になっています。しかしい出になっています。

福岡大学も教授会の英知と先見性と決断で一九八一年カリキュラムを変更し、また一九九五年より新しく脱皮しています。

この背景となった主なものを思い出してみますと平成三年(一九九一年)二月の大学教育の改革についてという大学審議会の答申があり、同年七月には大学設置基準の簡素化であります。それぞれ各大学は基本に則り、自由に独自のカリキュラムを整備でき、それとともに教育活動の自己評価を行うことが義務づけられました。生涯学習に対応した履修形態を、いろいろに用意することが自分たちで出来ることとなったのです。これがカリキュラムの改革の基盤となりました。

この他に当時背景として重要なのはたまたびの医師国家試験の改正と研修医制度の変更、認定専門医制度を忘れてはならず、これまた大学の医

学教育の方策に少なからず影響を与えた様です。

なるほど、用意できたカリキュラムで新しい時代の医学の第一歩をつかまえられるし、また医師国家試験を目標とした教育を主とするのも専門的医学教育の第一歩として重要ですね。しかし社会のなかの医師、社会人としての医療をもつものに対する教育としては何か一つぬけているように思われます。医局に入ってから医療の鍛錬のなかでこれら

の一部分は、いろいろの形で教えられましようが十分でありません。また後で必要とときにゆとりで習得するのはなく、学生時代に各分野でこの「early exposure」が必要でしょう。

対社会としても、患者さんに対して医療世界のなかから医師として窓を社会に開けてみるのみでは、一寸足りません。医療集団は他の集団が社会に対してしているのとは違うスタイルをとっているのだと思えます。

医療というものは、医学とscienceに根をおろして、人の病を治すにも全人的な医療という視点から考え、行動し、また人間の健康を問う直すことが問われています。だから診断を含め、専門的技術を駆使できる医学医療の真剣な専攻が望まれています。そのためにそれを十分に

行なう医師は何かと、その他の分野すなわち心理学・社会学・法律学・芸術学・文学・宗学などに対して多彩な取り組みが必要と昔からいわれています。この周知のことです。このように人間にかかわる学問を十分に知っておくことを望みます。望まれるのはいまでもありません。

このようなどで現在の医学教育のなかで講義や実習やBSLなどによる専門的な知識や理論や技能の獲得、すなわち、一人ひとりの医学・医療の勉強は先にあげた勉強とともに修練をうけ自ら行うことが必要なのは勿論ですが

なお、私は次のような分野のことも心にとめてやっておくことが、大切だと思っています。それは医師法、社会福祉法、精神保健法、老人保健法、母子保健法など多いようですが、医療をとりまく諸種の法律の概略や医事紛争を含めての医事問題は必要となりましよう。なかには日本の医療行政の組立など、その社会経済の関わりとともに少しづつでも勉強しておくことが大切だと思っています。

これらのことから自他と、医師と患者の関係を教えられる、社会人としての医師の役割、社会人としてのモラルの基本を教えられる専門的医療をますますよく生かすことになりましよう。

やはり早くから関心をもつて社会とのつながりを感じることに、医学と社会との接点のなかで、そして医学教育の日常坐臥のなかで勉強の楽しさを見出すことになりましよう。このことは医療人として大切な初発の際、初心を知るための事項の一つと思われます。

自分の体型・視点を定めるにも重要で、より一層医師としての感性を獲得できるのではないかと思っています。

永い教職の経験からこの様なことを考えました。そしてこれらの事を出来るならば、この六年間の教職のなかには、概略でもその基本的な考えを習ってゆくことは大切であろうと思ひ、あえて記してみました。

福岡大学内科学教授 中島 興志行



昭和五十八年アメリカ留学から帰る福岡大学に復帰後、留学中の経験を生かすべく循環器領域の教育、研究、診療に従事しました。留学中から興味をもっていた高血圧性心疾患の心機能の臨床的研究に加えて、心筋虚血再灌流の動物実験も開始しました。

来し方を振り返ってみますと、思い出が走馬燈のように浮かんできます。昭和四十八年十月開設間もない福岡大病院に助手として採用され、荒川規矩男教授の主宰されま

す第二内科で二十一年間に及び教育、研究、診療に携わってまいりました。留学するまで

の最初の六年間は、腎臓領域を担当する助手として勤務しました。九大病院の研修医期間中に腎不全患者の主治医になり、血液透析のタンクをみる

ことがあったとはいえ、腎疾患診療の最前線に動くのは初めてでした。泌尿器科の先生方の御援助を戴きながら、最初に腹膜透析を施行したこ

とや、第一号の血液透析患者の内シャント穿孔が手がかかる

任も重たいといえるでしょう。赴任後すぐ、大学本部のサポートが得られて、心エコード

ップラー装置(東芝SSD-140A)、トレッドミル負荷心電

図装置(マルケット社CAS E)、ホルター心電図解析装置

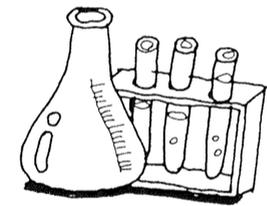
(Space Labs FT1000)などの循環器機器がそろい、循環器を中心とした内科診療

を行なっています。外来診療だけでなく、入院診療も行な

っており、狭心症や心不全の患者だけでなく、急性副腎ク

リーゼや多臓器不全を伴う敗血症の患者も入院し、全スタ

ッフが丸となって診療に取り組んでいるところです。



第八十九回 医師国家試験 合格者と入局先

平成七年三月十八日、十九日に行われた第八十九回医師国家試験に本学から百二十八名が受験し、九十六名が合格した。合格率は七五・〇%であった。

合格者の研修先(福大病院研修生は科名のみ)は、次のとおり。

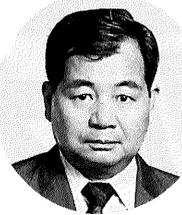
- 浅山 勲 整形外科
- 麻生 大輔 沖繩県立中部病院
- 阿南 章 内科
- 有吉 美紀 九大小児科
- 石河 利之 整形外科
- 石橋 理香 外科
- 上野 雄史 脳神経外科
- 梅田 尚靖 眼科
- 大久保正一 外科
- 大林 武裕 熊大内科
- 加来 良夫 筑紫内・消化科
- 加藤 治子 筑紫内・消化科
- 浦池 紫乃 筑紫内・消化科
- 神辺 真美 九大内科
- 木下 和泉 放射線科
- 木村 浩二 放射線科
- 久間 文明 九大内科
- 黒原 篤志 高知医科大学
- 河野 修三 放射線科
- 高良 真一 放射線科
- 兒玉 利勝 放射線科
- 小嶺 俊 筑紫整形外科
- 酒井 真志 外科
- 周田光一郎 内科
- 白井 雅子 内科
- 白井洋一朗 麻酔科
- 城石 達光 整形外科
- 新里 美和 長大内科
- 菅野 博子 麻酔科
- 関 克典 筑紫外科
- 園田 恭志 眼科
- 高橋 聡 外科
- 武市 由可 長大内科
- 田爪陽一朗 宮医大整形外科
- 近本 夏子 内科
- 角田 雄一 筑紫泌尿器科
- 富田 恵理 九大耳鼻科
- 内藤 温友 麻酔科
- 新村 英也 内科
- 西尾 淳 整形外科
- 西川 宏明 内科
- 野間栄次郎 筑紫内・消化科
- 濱崎喜興志 鹿大耳鼻科
- 林 由浩 山外外科
- 平川 栄二 外科
- 平山 晃子 鹿大麻酔科
- 深町 滋 小児科
- 藤木 智子 麻酔科
- 藤元 幹太 内科
- 藤元 美星 宮崎医科大学
- 堀内 新司 産婦人科
- 松村 文子 皮膚科
- 松本 和久 健和総合病院
- 松山 和弘 大分医大
- 壬生 真人 岡山国立病院 小児医療セン
- 宮脇 順子 麻酔科
- 村上 友則 久大産婦人科
- 本村 卓志 麻酔科
- 本村 禎 心臓外科
- 森田 真 九大外科
- 森戸 夏美 内科
- 八尋 英二 内科
- 山崎 満徳 広大臨床検査
- 山口真三志 内科
- 山野 貴史 耳鼻科
- 力丸 文秀 耳鼻科
- 渡邊 亜紀 皮膚科
- 安藤 智恵 内科
- 瀧川 謙治 鹿大外科
- 陳 彦善 東京女子医大
- 塚田 章博 信州大整形外科
- 西村 拓 筑紫内・消化科
- 西村 宏章 筑紫外科
- 平松 久大整形外科
- 箕田政一郎 久大整形外科
- 安成 英文 筑紫外科
- 山村 基成 広大外科
- 重川 誠二 脳神経外科
- 竹下 宗範 筑紫内科
- 中島 祐一 岡大循環器内

自己紹介

平成六年十一月以降に昇格又は就任

筑紫病院脳神経外科教授

田中 彰



昭和四十二年九州大学医学部を卒業し、同大学脳神経外科に入学しました。大学院学生としてキンドリングを研究し、その後二年間、アメリカ国立医学研究所で遷移性放射線壊死と脳循環の基礎を研究しました。昭和四十九年に大学院を卒業し、福岡大学脳神経外科に助手として採用されました。昭和六十一年に筑紫病院に転属され、今日に至っております。当病院は、研究の府である大学病院というよりも臨床中心の地域医療センターとして活動しています。

薬理学助教

阿部 正義



昭和五十一年に医学部を卒業し三年間の臨床修練の後、

当教室に三年余り在職し、主に生理学的手法で薬理学的研究をおこないました。その後臨床教室に戻り、臨床研究、教育のいわゆる三足の草鞋を履きながら、生化学的手法により人白血球からのロイコトリエン産生機構と炎症性疾患との関連を追求してきました。その間米国加州のスクリプス研究所で二年間の留学生活を送りました。多数のゴルフ場に恵まれたサンディエゴは気候もよく楽しい日々でした。米国で師事したヒューグリー教授より補体を中心とした蛋白質の研究手法を教わり、炎症性疾患でのC3bの役割について研究を続けています。

内科第一講師

俞 孝一

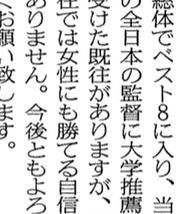


昭和五十五年福岡大学医学部卒業後、第一内科に入学。二年間の研修後、福大大学院に進みました。当時は、リンパ球表面抗原に対するモノクローナル抗体の販売がはじまった頃で、現在は南区の大橋で開業されている清水正賀先生から、肝炎生検標本を中心としてモノクローナル抗体を使った組織染色を勧められ、肝炎患における細胞性免疫についての興味を生きました。平成二年より教授および木村暢宏講師のご好意により、カナダ・トロントにあるマウントサイナイ病院研究所での留学の機会を頂きました。肝炎とは無縁のマウス末梢リンパ球のアポトーシスとアナルジの解明により、肝炎発症のメカニズムに迫りたいと思っております。今後、ご指導の程宜しくお願い致します。

産婦人科教室に入学致しました。最初は産科中心の研修でしたが次第に婦人科疾患の方にも興味を覚え、昭和六十三年から病態構造系大学院(菊池教授指導)にて四年間勉強させて頂きました。その間、岩崎教授の厳しい指導の下、子宮癌肉腫(Muller管腫瘍)の組織培養、細胞生物学の研究に従事しました。本腫瘍の組織発生の解明に少しでも貢献できたことは非常に幸運だったと思います。その後、国立病院九州がセンター勤務を経て平成五年四月より当科に復帰し、主として腫瘍関係の仕事に従事しています。最近、研修医の頃に産科超音波で勉強した経験を活かし、婦人科疾患におけるカラードプラ診断の臨床研究を行なっています。趣味はスポーツで、特に空手道は高校時代に総体でベスト8に入り、当時の全日本の監督に大学推薦を受けた経緯がありますが、現在では女性にも勝てる自信はありません。今後ともよろしくお願い致します。

放射線部講師

宇都宮英綱



昭和五十五年福岡大学医学部を卒業後、放射線科に入学しました。放射線科に進んだ動機は、二十歳の頃米国のマサチューセッツ総合病院を見学したときに、放射線科が病院の中心的役割を果たしていると感じ、将来日本も米国のようになるのではないかと考えたからです。入局当初、特徴のあることを勉強しようと思いついた放射線科におられた奥寺利男先生のもとで神経放射線学を学びました。昭和五十八年、久留米市にある聖マリア病院に脳神経センターが開設されることになり、神経放射線科の一員として赴任しました。その後十年間、同病院で診療に従事しました。聖マリア病院は新生児医療でも全国有数の病院で、多くのハートキャップを持った子供達の画像診断に携わることができました。小児領域の神経放射線学を専攻する人は全国的にも少なく、診断に苦慮することが多かったのですが、逆に専門家になれるチャンスと思い、特に中枢神経系奇形に焦点を絞って勉強しました。十年間の長きにわたり市中病院で自由に仕事をしきつたせいか、大学のシステムの違いに少なからず当惑すると同時に学生の教育が如何に努力と学力を要するものか痛感する今日この頃です。今後は福岡大学のスタッフの一員として、上下の立場にこだわらない、自由で責任のある医療を目指して精進する所存です。宜しくお願いいたします。

放射線部講師

東原 秀行



昭和五十八年福岡大学医学部を卒業後、放射線科(第一病理解剖)で、肝細胞癌に対する肝動脈塞栓術の治療効果と、CT画像との対比研究をさせて頂きました。現在は、腹部領域の血管造影を中心とした画像診断と、悪性腫瘍に対する動脈塞栓術をはじめとする血管造影技術を用いた各種血管内治療に携わっています。学生の教育に関しては、単に学問の詰め込みではなく、どんな患者さんともまともな話しが出来る様に幅広い知識とやさしさを身につけようことを目標にしています。趣味は盆栽、ラン栽培と釣りますが、今のところ時間的余裕がありません。高校の三年間は親から何故かを追

産婦人科講師

江本 精



出身は直方市で、中学は北九州、高校は福井、大学は名古屋(愛知医科大学)と各地をまわり、昭和五十九年に医学部卒業後、無事、福岡大学

「親心・子心」(13)

心臓血管外科助教 田代 忠



今回、研修医の方々に何かお話を聞かせるものとして、私の前任地である聖マリア病院での経験をいくつかご紹介させていただきます。ご依頼の主旨は、「大学以外の研修病院での研修を通して福岡大学の研修医のみなさんの今後の研修に何か役立つことを書いてほしい」と考え、私の研修医との関わりについて書くことにしました。

私の前任地の聖マリア病院は、久留米市にあり一三〇〇床の総合病院で、内科学会、外科学会などの研修指定病院となっていました。また、救急医療に早くから取り組んでおり、二十四時間の一次から三次までの救急医療を行なっていました。私が所属していた胸部心臓血管外科は、副院長、私、さらに卒業後十五年目と七年目のスタッフと卒業後三、四年目の研修医の五人からなり、週三回の定例手術(開心術二例、非開心術一例)とそれ以外の緊急手術を行なっていました。また、循環器内科と連携していました。研修医の主な組織適合抗原、T細胞抗原レセプター、サイトカインとその受容体、接着分子などの遺伝的要因を分子レベルで解析し、難病の病因病態に迫り、それらの知見に基づき新しい治療法の開発に寄与したいと念じておりました。今後とも宜しく御指導御鞭撻のほどをお願い申し上げます。

研修医の仕事は、主治医として術前後の管理、手術に参加すること、当直として救急外来に内科も含めた循環器患者の初診に当たること、月に一回抄読会で発表すること、胸部外科、循環器学会の地方会の年一回、さらに総

私、研修医の指導をするうえで心がけたことは、研修医の研修内容が知的な部分と経験的な部分とでバランスがうまくとれる様にすることです。知的な部分とは言うまでもなく知識であり、本も雑誌を読んだり学会発表を行なうことにより得られる知識です。また経験的な部分とは、実際に患者を診察したり、術後管理を行なうことや、手術中の糸結びをはじめとした手術技術など、経験により蓄積されるものです。この両者が繰り返行なわれることが重要で、たとえば、学生の知識は、本のうえで得られる知識でそれだけでは実際には役に立たないことも多く、また日頃の勉強も、見たことも経験した事もないことを本で覚えるわけですから大変なことです。これは知的な部分のみが偏った見本です(そうならいよいよBLSが行なわれています)。しかし、医者になつてからは(少なくとも臨床床では)簡単です。その日に経験した事を、夜に本を読んで調べて自分の知識を幅広くアップし、更に知識を幅広く加えるわけです。経験(診察)と知識(勉強)を交互に繰り返すことが大切で

(困った時や一人の時に助けられるのは自分の知識だけです。そして、良き友人を待たずして、友人の知識も助けてくれるかもしれないと)

研修医の仕事は、主治医として術前後の管理、手術に参加すること、当直として救急外来に内科も含めた循環器患者の初診に当たること、月に一回抄読会で発表すること、胸部外科、循環器学会の地方会の年一回、さらに総

教室紹介

福岡大学生理学第一

当教室は、昭和四十七年医学部創設と同時に、初代富田忠雄教授のもとに開設され、昭和五十四年、二代目今永教授となり今日に至っている。現在、今永一成教授、坂本康二助教授、井上眞澄助教授、上原明併任講師、矢野晶子助手、赤星瑞絵教育技術職員と安河内緑教育技術職員(人間生物系総合研究室)と三名の研究生が在籍している。また、短期間であるが毎年一名程度の外国人の訪問研究員を迎え国際交流も活発に行っている。

研究では、心筋細胞、平滑筋細胞やインシュリン、カテコラミン分泌細胞などの機能を、主に電気生理学的に、膜イオンチャネル、細胞内情報機構の立場から追究している。これらに基づいて、不整脈や筋収縮、弛緩異常、分泌障害など、病態生理学の研究へも発展させている。少数ではあるが幅広い範囲の研究に精力的に取り組んでおり、これらの成果を論文発表と共に国際学会を含めいろいろの学会で積極的に発表している。この様な研究体勢の中で、これまで六名の大学院生が学位を得た。

滑筋細胞やインシュリン、カテコラミン分泌細胞などの機能を、主に電気生理学的に、膜イオンチャネル、細胞内情報機構の立場から追究している。これらに基づいて、不整脈や筋収縮、弛緩異常、分泌障害など、病態生理学の研究へも発展させている。少数ではあるが幅広い範囲の研究に精力的に取り組んでおり、これらの成果を論文発表と共に国際学会を含めいろいろの学会で積極的に発表している。この様な研究体勢の中で、これまで六名の大学院生が学位を得た。



- (二頁下段より続)
- 山崎 英樹 鹿大産婦人科
- 安部 龍暢 整形外科
- 岡 毅 久大皮膚科
- 島田 英彦 鹿大皮膚科
- 清水 千枝 九大総合診療部
- 白井 竜 筑紫内・消化
- 松隈 博 九大眼科
- 力丸 美保 内科
- 小柳 徳明 久大内科
- 中本 浩史 健康管理科
- 浅野 秀二 精神科
- 中江 光博 鹿大産婦人科
- 細谷 英作 耳鼻科
- 嘉悦 智隆 健康管理科
- 坂口 康一 内科
- 谷川 浩一 外科

海外便り

サンフランシスコから

飯田 博幸

California 大学 San Francisco 校 (University of California San Francisco; UCSF) はサンフランシスコ市内ゴールデンゲートパーク近くの小高い丘の上にあります。アメリカの大学と聞くと広大な敷地をもつ一つの町のようなキャンパスをおもむくかべる方も多いと思いますが、このキャンパスはごくコンパクトに敷地としては福岡大学医学部とあまり変わらないのではないかと思います。しかしながら UCSF は現存する西の医科大学では最も長い歴史

史をもっており(一八六四年に Toland 医科大学として創設され、一八七三年にUCに編入)、医学部のレベルとしては全米で三位にランクされています。日本やこの国の一般の人にはあまり馴染が深くないが UCSF が医、歯、薬、看護学部と大学院 PhD コースからなる医科大学大学院で、所謂学部生を募集していないためだと思われています。UCSF では AIDS の研究や臓器移植、出生前診断、胎児手術、遺伝子治療などの先端臨床医学的研究が盛んですが、一方基礎医学の研究実績も目覚ましい、proto-oncogene の発見でノーベル賞を受賞した Michael Bishop や Harold Var-

mus (昨年よの NIH 所長、驚いたことは一つの大学で莫大な研究費を使っているのですが、その研究費を手に入れるために大変な努力が払われていること)です。業績をあげて研究費を手に入れ研究室や研究員の充実を計り更に業績をあげる。研究者の方も有名で自分の研究ができる環境に集まる。これができなければいまは首がたぶ。非常に合理的であるけれども競争も厳しかったころでしようか。またレジデントや学生の教育システムが非常にしっかりしているとも羨ましいところですが、Faculty は大変であると思つていますが、ゆとり仕事をしているように見えるのは日本のように雑用がないせいでしょうか?

存じの方も多いと思いますがサンフランシスコはアメリカの西の玄関として最も観光しやすい町、初めての海外旅行に適した町として親しまれています。私はゴールデンゲートパークのすそ野に住んでいますが、治安は良好で市内には多くの美術館、レストラン、ライブハウス、公園があり、芸術やメジャーリーグスポーツの観賞には事欠きません。もちろんただ同然のテニスコートやゴルフ場、近郊のスキー場も魅力です。アジア系の住民が多いので日本人にとってはとても生活しやすい都市で他の州にいる同僚が訪れて羨ましがられるのも無理はないと思われまふ。将来アメリカで過ごしてみたいと思われ方は候補の一つに挙げてはどうかでしょうか。最後にになりましたが留学にあたり御推薦を頂いた緒方公介教授、御協力頂いた緒方公介教授、教室の皆様、福岡大学医学部に

対し謹んで御礼申し上げます。

クリーブランドクリニクより

松吉 哲二

こちらでは木々が葉を落とす暗い冬が去り、サマータイムになりやと陽気な季節を迎えました。夏と冬では生活が変わります。今からの季節は夜九時過ぎまで明るく、アフターファイブにゴルフもできればバーベキューパーティーに長い一日を満喫出来ます。Cleveland はオハイオ州北部のエリー湖に面する工業都市ですが、現在は産業の低迷とともにドーナツ化現象が起り Cleveland Clinic のある地区は Case Western Reserve University や博物館、あるいは Cleveland Orchestra の Home である Severance Hall などが構成する文教地区の西外れにあるのですが、これより Downtown までの数マイルは治安が悪く、空き屋、空きビルが連なっています。但し、日本人の多くが暮らす郊外の住宅地では治安は良く安全だと思えます。さて、Cleveland Clinic はアラブの国王が自家用飛行機で毎年健診に訪れることでも有名ですが、年間外来患者は昨年統計で八三万人、九四一床のベッド総数に對し入院手術患者三万例に及びます。特に胸部心臓外科部門は十名の Staff Surgeon が年間四、〇〇〇例を越える手術をこなし、成人用 ICU が七〇床ありフル稼働しています。現在私は、Biomedical Engineering 部門の原崎弘章先生のところで完全植込み型人工心臓、植込み型人工心臓、人工小口径人工血管、人工弁、その他多岐にわたって基礎から臨床応用に至る研究開発にあたっています。Staff の他 fellow, student に至るまで engineer と医者が一体となって研究体制がとられています。研究 Staff にとって如何に研究費を捻出するか死活的な問題で研究システムはその財源を NIH) からの Grant, 企業や US Contract, OHIO State 大学や軍との提携と

多岐にわたる、Clinic の on-going project の総額が三、七〇〇万ドルに及び恐れいります。この部門は、世界の人工臓器の礎を築き現存も活躍中の阿久津哲造、能勢之彦をはじめとする多くの日本人研究者が育った地であり、歴史的重みを感じます。現在は心臓領域と整形外科領域とからなり、あわせて十名の日本人 Staff, Fellow が従事しています。うち九州各地の大学から私を含めて五名来ており英語に負けずに九州弁がまかり通っています。一方、研究者に対して文献検索をはじめ copy, password disk をはじめとする文具類まで無料でふんだんに提供をしてくれる環境は充実しており、動物を使った実験研究においても手術から血液検体に至るまで臨床と同レベルで取り扱える姿勢は並大抵ではないと感心させられます。この一年間でいろんな研究に従事しましたが、同じ実験を日本でもやるには財政的困難を感じます。逆に日本に財政的豊かな研究施設があれば、こちらに負けない、しかももっと短時間で開発が進むのではないかと考える今日この頃です。

教室紹介

福岡大学内科学第一

福岡大学第一内科教室は、平成五年に開講二十周年を迎えましたが、それからはや二年が経とうとしています。教室は奥村尚教授のもと、消化管(岡田助教)、肝臓(司城講師)、内分泌(浅野助教)、神経(丸野助教)、血液(久野講師)による五つの専門分野によって運営されています。平成七年六月現在の構成は、右記のほか講師六名、助手十名、医員十九名、研修医二十二名、研究生二十一名、大学院生七名となっています。卒前の教育に関しては、M3 に対する臨床医学総論、M4 に対するインテグレートド・カリキュラムによる各科の講義、M5 の BSL, M6 の Super BSL などを担当)ごま

す。M5 に対する BSL は、四つのグループが四週間ずつ回っており、週単位で五つの専門分野をローテイトし、患者の診療を実際に体験しています。毎週金曜日は朝から夕刻まで、神経グループは単独で、他の四グループは合同でそれぞれまとめの検討会をおこなっています。臨床医学の基礎となる裾野の広い内科学の本質をできる限り体得して貰いたいと思つて努力しています。

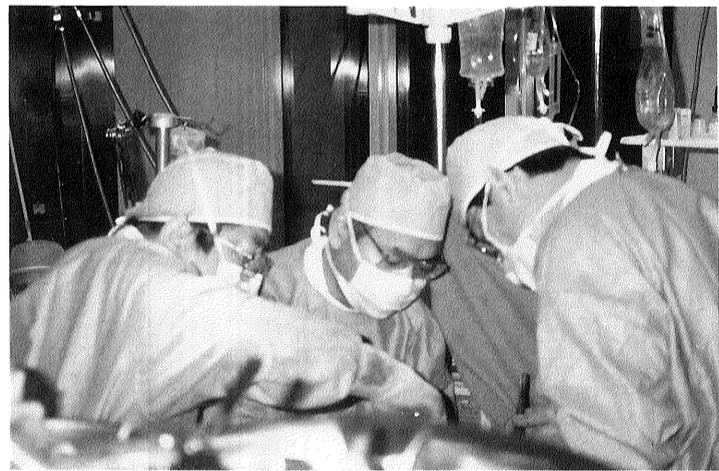
第一内科の専属の病棟は、六階西と北病棟で、さらに七階にも常時若千名の入院患者がいます。診療および研修体制に関しては、月曜日に、肝臓、消化管、神経、内分泌、木曜日に血液、それぞれの研究室単位

で入院患者のカンファレンスがおこなわれ、必要があれば第二内科をはじめとする他科よりのコンサルテーションをうけています。また興味ある症例、問題ある症例については、毎週教室カンファレンスによって総合的に検討をおこなっています。月に一回は他科から講師を招いてそれぞれのトピックスなどを講義していただきます。このカンファレンスには BSL の M5 の学生も必ず出席し、学生にとってはハイレベルの内科臨床を見聞し、教室員が、学会発表、症例報告、原著論文が著実に増加し、最近の傾向としては英文論文、なかでも国際学会発表の演題数の増加が目立っています。

最後に教室員一同、教育、診療、研究に関して、さらなる内科教室としての充実を期して、努力をつづける所存です。今後共、よろしくお願ひ致します。



UCSF のビル群。後方にサンフランシスコのダウンタウンを望む



実験中の筆者(左)、中央が原崎先生

福岡大学医学会 第三十二回例会の報告

日時 平成七年二月一日(水)
午後三時~午後四時四十五分
場所 福岡大学医学部臨床大講堂

I 優秀論文賞授与

「開心術における自己血輸血の有効性とその限界に関する検討」
心臓血管外科教室 岩隈 昭夫

「腎移植における灌流・冷却保存液へのホスホエノールピルビン酸の応用」
泌尿器科学教室 北城 守文

II 講演

1、座長 朝長 正道 教授
「脳神経外科における頭蓋底の外科」
脳神経外科 福島 武雄 教授

2、座長 小野 順子 教授
「糖尿病の概念とヒマンディアン」
筑紫病院内科第二 佐々木 悠 助教授

3、座長 木村 道生 教授
「虚血性心疾患に対する外科治療」
心臓血管外科 田代 忠 助教授



空から見た Cleveland clinic 全景と遠方に downtown を望む

教室便り

学位取得

平田 恭子 (内科学第二) 福岡大学に提出。平成六年十一月十一日付で医学博士授与。

論文名 "Apolipoprotein(a) phenotypes and serum lipoprotein(a) levels in maintenance hemodialysis patients with/without diabetes mellitus."

論文名 "Developmental increase of AT1A, but not AT1B, receptor mRNA level at the preoptic area in spontaneously hypertensive rats."

論文名 "A reference of the GOLD classification of monoclonal antibodies against carcinoembryonic antigen to the domain structure of the carcinoembryonic antigen molecule."

論文名 "The analysis of Epstein-Barr viral genome in so-called malignant histiocytosis syndrome."

論文名 "Giant cell tumors of tendon sheath a single and multiple immunostaining analysis."

論文名 "In vitro and in vivo Enhancement of Bactericidal Activity of Phagocytes against Klebsiella pneumoniae treated with Subminimally Concentrated Cefodizime"

論文名 "The new muscarinic M1-receptor antagonist YM796 evokes yawning and increases oxytocin secretion from the posterior pituitary gland in rats. 3) Behavioral effects of OPC-14597, a potential antipsychotic agent, in rats."

論文名 "Helicobacter pylori 陽性十二指腸潰瘍に対する除菌治療の治癒及び再発に及ぼす効果に関する研究"

論文名 "Two novel familial lecithin-cholesterol acyltransferase deficiencies due to one base deletion (G⁸⁷³) in exon 6 and an amino acid substitution (Gly³⁴⁴→Ser)." 論文名 "豚豚トランスフェリン遺伝子多型と血清α₂-脂蛋白性障害との関係に関する研究"

論文名 "日本の健康寿命表一九九〇年 世界最長寿命の質の検証" 論文名 "造影CTによる肝臓癌の動脈血流動態に関する研究"

論文名 "悪性神経腫瘍に対する Tumor Necrosis Factor (TNF) の効果に関する実験的研究"

論文名 "The effects of chronic endoscopic variceal sclerotherapy on systemic and splanchnic hemodynamics in patients with cirrhosis."

論文名 "Tonotropic mechanisms involved in postsynaptic inhibition by endothelins of ganglionic transmission in the dog cardiac sympathetic ganglia."

論文名 "The analysis of Epstein-Barr viral genome in so-called malignant histiocytosis syndrome."

論文名 "Giant cell tumors of tendon sheath a single and multiple immunostaining analysis."

論文名 "In vitro and in vivo Enhancement of Bactericidal Activity of Phagocytes against Klebsiella pneumoniae treated with Subminimally Concentrated Cefodizime"

論文名 "The new muscarinic M1-receptor antagonist YM796 evokes yawning and increases oxytocin secretion from the posterior pituitary gland in rats. 3) Behavioral effects of OPC-14597, a potential antipsychotic agent, in rats."

論文名 "Helicobacter pylori 陽性十二指腸潰瘍に対する除菌治療の治癒及び再発に及ぼす効果に関する研究"

論文名 "Two novel familial lecithin-cholesterol acyltransferase deficiencies due to one base deletion (G⁸⁷³) in exon 6 and an amino acid substitution (Gly³⁴⁴→Ser)." 論文名 "豚豚トランスフェリン遺伝子多型と血清α₂-脂蛋白性障害との関係に関する研究"

受賞

星子 浄水 (内科学第二) 岡田光男、瀬尾充、八尾恒良、松岡由香里、吉永一彦、奥村梅第8回日本消化器病学会奨励賞

研究業績 "Crohn 病の活動度の定量的評価—新しい活動指数の提唱—" 廣瀬 伸一 (小児科学) 貝原守一 医学振興財団賞 (つづいた研究発表に對して)

研究業績 "Glycosyl-phosphatidyl-inositol 結合型膜タンパク質の生合成と発作性夜間血色素尿症の発症機構に関する研究" 廣瀬 伸一、瀧野 昭久 (小児科学) 臨床研究奨励基金 (発展性のある研究計画に對して)

研究業績 "メルトンレニン脳筋症 (MELAS) に對する遺伝学的診断法の改良" 中村 純一 (外科学第二) 第一回日本乳癌学会賞 (わが国における乳癌研究に功績があった研究者二名を日本乳癌学会学術委員会が選考)

研究業績 "Yamashita J, et al. "Immunoreactive hepatocyte growth factor is a strong and independent predictor of recurrence and survival in human breast cancer." (Cancer Research, Vol 54, 1630-1633, 1994)

研究業績 "腎移植における灌流・冷却保存液へのホスホ

研究業績 "腎移植における灌流・冷却保存液へのホスホ

研究業績 "腎移植における灌流・冷却保存液へのホスホ

研究業績 "腎移植における灌流・冷却保存液へのホスホ

学術交流

論文名 "In vitro モデルによる硝子体液化の研究—硝子体ゲルの離水に対する血漿の影響—" 今村 信秀 (耳鼻咽喉科) 論文名 "慢性中耳炎における骨導閾値上昇とその病態に関する研究"

論文名 "慢性的中耳炎における骨導閾値上昇とその病態に関する研究"

海外留学

① 研修先② 目的③ 期間 豊島 秀夫 (内科学第二) ① アメリカ Irvine Medical Center, CA ② 肺気腫症の病態③ 平成七年二月〜平成八年一月 (予定)

① オーストラリア、パース W.A. 小児病院研究所、臨床研究部門 (リサーチフェロー) ② 小児呼吸器病学③ 平成五年六月〜平成七年五月

① アメリカ MCP-Hahnemann Univ. Krancer Center for Inflammatory Bowel Disease Research. ② 炎症性大腸疾患における癌遺伝子の検索③ 平成七年六月〜平成八年六月三十日

① 所属② 目的③ 期間④ 訪問先 LIU HSIN HSIANG (劉 新相) (病理学第二) ① 台湾、中山医学院臨床検査部医師② 研究課題 "甲状腺腫瘍の Matrix Metalloproteinase との関係性"③ 平成七年四月一日〜平成十一年三月三十一日④ 病理学第二教室 (大学院生)

① Professor of Psychiatry, Asan Medical Center, University of Ulsan College of Medicine (蔚山大学校) ② 医学博士 (蔚山大学校) ③ 医学博士 (蔚山大学校) ④ 医学博士 (蔚山大学校)

① 蔚山大学校 蔚山大学校 蔚山大学校 蔚山大学校

新刊紹介

① 中国桂林市第二人民医院内科医師の気管と肺移植の研究 ③ 平成七年四月一日〜平成八年三月三十日④ 外科学第二教室

① 重松峻夫 (公衆衛生学) ① 生命表研究 (編集と分担執筆) ② 古今書院③ 一九九五年④ 三三二・三三六〇円

① 重松峻夫 (公衆衛生学) ① 消化器集団検診の概念と要件—21世紀のメッセージをめぐって (有賀 三郎監修) "そのうち消化器集団検診のために" (分担) ② 杏林書院③ 一九九五年④ 二〇四・二一八七五円

① 荒川規矩男 (内科学第二) ① 新い治療薬 (化学第二) ② 免疫実験操作法 II (分担) ③ 南山堂③ 一九九五年④ 三三〇〇円

① 田代英一郎、荒川規矩男 (内科学第二) ① 今月の治療 (分担) ② 総合医学社③ 一九九五年④ 一三〇〇円

① 循環器病セミナー (分担) ② 日本心臓財団③ 一九九五年④ 一三〇〇円

① 川谷大治 (精神医学) ① シリーズ精神科症例集 6 "児童・青年精神医学" (分担) ② 中山書店③ 一九九四年④ 八八〇円

① 笠野一朗、安波洋一 (外科学第二) ① Annual Review 消化器 一九九五年 消化器 1, 消化器 (肝、脾、小腸) の器器 (分担) ② 中外医学社③ 一九九五年④ 九一九〇円

① 池田靖洋 (外科学第二) ① 消化器疾患 最新の治療 95/96 2, 慢性膵炎 b 外科的治療 (分担) ② 南山堂③ 一九九五年④ 一〇、〇〇〇円

① 白日高歩 (外科学第二) ① 白日高歩 (外科学第二) ① 白日高歩 (外科学第二) ① 白日高歩 (外科学第二)

① 白日高歩 (外科学第二) ① 白日高歩 (外科学第二) ① 白日高歩 (外科学第二) ① 白日高歩 (外科学第二)

① 白日高歩 (外科学第二) ① 白日高歩 (外科学第二) ① 白日高歩 (外科学第二) ① 白日高歩 (外科学第二)

① 白日高歩 (外科学第二) ① 白日高歩 (外科学第二) ① 白日高歩 (外科学第二) ① 白日高歩 (外科学第二)

① 白日高歩 (外科学第二) ① 白日高歩 (外科学第二) ① 白日高歩 (外科学第二) ① 白日高歩 (外科学第二)

① 白日高歩 (外科学第二) ① 白日高歩 (外科学第二) ① 白日高歩 (外科学第二) ① 白日高歩 (外科学第二)

① 白日高歩 (外科学第二) ① 白日高歩 (外科学第二) ① 白日高歩 (外科学第二) ① 白日高歩 (外科学第二)

① 宇都宮英綱 (放射線医学) ① 臨床神経科学—神経放射線学的診断・治療の進歩 CLINICAL NEUROSCIENCE—Advancement in Neurological Diagnosis and Treatment (玉木紀彦編) (分担) ② メヂカル出版③ 一九九五年④ 一、四〇四・三〇〇円

① 宇都宮英綱 (放射線医学) ① 臨床放射線別冊 中枢神経系のMRI (高橋睦正監修) (分担) ② 金原出版③ 一九九五年④ 一、〇〇八・五〇〇円

① 岡崎正敏、東原秀行 (放射線医学) ① 新いIVRS (実際の岩崎尚彌、古井滋編) "進行肝細胞癌 (Vp3 破裂症例: リビエール・ラチンスボニ)" (分担) ② 中外医学社③ 一九九五年④ 一、一四四・〇〇八円

① 守田則一 (健康管理学) ① 内科書 第四版 (島田馨責任編集) "消化管の一般検査" (p1442-1444) (分担) ② 中山書店③ 一九九五年④ 一、七五〇円

① 都 温彦 (歯科口腔外科学) ① 温彦 (歯科口腔外科学) ① 温彦 (歯科口腔外科学) ① 温彦 (歯科口腔外科学)

① 温彦 (歯科口腔外科学) ① 温彦 (歯科口腔外科学) ① 温彦 (歯科口腔外科学) ① 温彦 (歯科口腔外科学)

① 温彦 (歯科口腔外科学) ① 温彦 (歯科口腔外科学) ① 温彦 (歯科口腔外科学) ① 温彦 (歯科口腔外科学)

① 温彦 (歯科口腔外科学) ① 温彦 (歯科口腔外科学) ① 温彦 (歯科口腔外科学) ① 温彦 (歯科口腔外科学)

① 温彦 (歯科口腔外科学) ① 温彦 (歯科口腔外科学) ① 温彦 (歯科口腔外科学) ① 温彦 (歯科口腔外科学)

① 温彦 (歯科口腔外科学) ① 温彦 (歯科口腔外科学) ① 温彦 (歯科口腔外科学) ① 温彦 (歯科口腔外科学)